

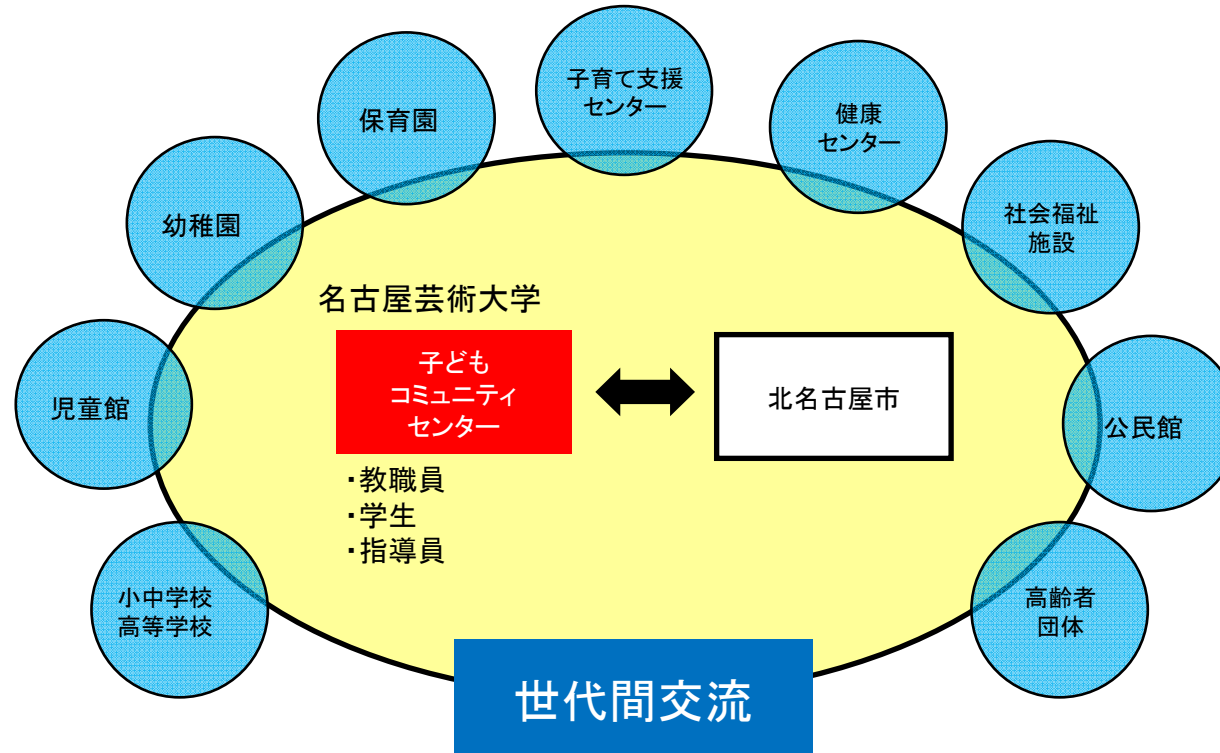
平成24年度未来経営戦略推進経費(経営基盤強化に貢献する先進的な取組み)採択事業

地域における世代をつなぐ 子育て支援のシステム化

— 大学と自治体の連携による —



01 大学と自治体の連携による子育て支援



名古屋芸術大学と北名古屋市の地域社会の発展及び人材の育成に寄与する連携協定をもとに、各施設・団体の連携を図る。支援の必要がある親子を発見した場合、すぐに最も適切な行政機関と連携し、支援のルートに乗せることが可能となり、問題解決が迅速になるなどの実効力が深化する。

子育て支援事業誕生の経緯

平成20年に名古屋芸術大学と北名古屋市が連携協定を締結

- 協定事項
- ①知的・物的資源の相互利用
 - ②人的交流及び職場体験の促進
 - ③教育・スポーツ及び文化・芸術の相互交流
 - ④地域のまちづくりの推進



地域に開放している生涯学習大学公開講座(平成3年より開講)のなかに子育て公開講座が存在したが、それとは別に平成21年度から「子育て支援講座」を開催し、名古屋芸術大学子育て支援事業がスタートした。

取り組みの背景

①少子化・都市化に伴う子育て環境の変化

- ・遊び友だちや多様な年齢・関係の子どもを含めた人たちと、接触や交流機会の減少や喪失が拡大。

②地域の子育て支援事業の「漏れ」、「隙間」が存在

- ・事業の存在を知らない、利用しない、否定的である人たちに対する働きかけ。

子育て支援事業の目的

取り組み背景を踏まえたうえで、遊びの環境を整え、親子が自由に遊べる場を設けるだけでなく、意識的に異なる実践形態（親子主導の「自由な遊び」と指導員主導の「テーマ遊び」）を研究的試みとして採り入れ、親の子育て意識にどう影響してくるか、かつ子育て支援の場における遊びのあり方の検討に資することを目的としている。

取り組みテーマ

- 1 子育て・子育て支援の場における世代をつなぐ遊びの質向上に関する取り組み
- 2 遊びの発展のための世代をつなぐ遊具・玩具・文化財と表現に関する取り組み
- 3 家庭育児(0・1・2歳児)と3歳児以上の幼稚園・保育園での保育者・教員養成との関連的な取り組み
- 4 子育てについての困難等の相談に関する取り組み
- 5 地域における子育て支援の場と連携し、北名古屋市の世代をつなぐ子育て支援のシステム化に向けての取り組み

取り組みの特徴

- 1 子育て・子育て支援を世代間交流を媒介に行い地域活性化に向け、大学の基盤充実につなげる。
- 2 この地域に一大学しか存在していないことを生かし、自治体（北名古屋市）との連携を強める。
- 3 大学の教育資源を生かしたソフト（実践と研究）面とハード（北名古屋市との連携システム）面の結合を重視する。

04 子育て支援事業の変遷

子育て支援講座

開催年度	平成21年・22年
対象	1・2歳児とその親
内容	子育て講座（テーマのある遊びの場と子育て相談）
開催日時	5月～7月及び10月～1月 毎週水・木曜10時～11時30分
参加人数	20組（登録制）
募集方法	北名古屋市役所に募集チラシ設置
学生参加	ゼミ参加以外はほとんどなし



子育て・子育てワークショップ

開催年度	平成23年・24年
対象	1・2歳児とその親
内容	自由遊び、テーマ遊び、ミニミニ講座
開催日時	5月～7月及び10月～1月 毎週水・木曜10時～11時30分
人数	100組（登録制）
募集方法	北名古屋市役所ほか関連施設に募集チラシ・ワークショップ通信設置
学生参加	70名以上（全学生に呼びかけ登録制とする）



子どもコミュニティセンター（構想中）

【年次計画】
 平成24年度：施設・設備の充実、「子育て・子育てワークショップ」の充実、当施設を拠点とする5つの取り組みテーマに関する実態調査、調査に基づく取り組み方法の確立と試行。

開催年度	平成25年から開設予定
対象	1・2歳児とその親及び多世代
内容	遊びの広場、ミニミニ講座、世代間交流と地域との交流を強める
開催日時	5月～7月及び10月～1月 週4日程度開催予定
人数	随時募集（緩やかな登録制）
募集方法	北名古屋市役所ほか関連施設に募集チラシ等を設置
学生参加	全学生に参加呼びかけ、事業と結合し参加しやすいカリキュラム体制をつくる

【年次計画】
 平成25年度：取り組みテーマごとに前年度の試行をもとに計画を補正し、本格的取り組みの展開、記録、分析。
 取り組みテーマ1～4までの成果の総合、取り組みテーマ5により、北名古屋市との交流を活発にし、システム化構想の実現。
 平成26年度：前年度の取り組みを継続しつつ、平成25年度までの成果を検証し、総括する。

子育て・子育てワークショップ、子どもコミュニティセンターの活動内容

前記5つの取り組みテーマを受け、子育て・子育てワークショップ、子どもコミュニティセンターでは次の4つの柱をたて実施・計画している。

①大学が行う「子育て支援」の事業の分析・評価(平成24年度から実施)

本学が主催する「子育て・子育てワークショップ」に参加した親から、子育ての実際、子育てにかかる生の声、気持ちを聴き取り、さらにそこを出た後の状況を追跡して聴き取ることによって、「子育て・子育てワークショップ」の課題、問題点を探り、評価をし、次につなげていく。

現在、「子育て・子育てワークショップ」には、1・2歳児の親子100組以上が登録し、週2回の実施日に20～30組の親子が参加している。北名古屋市には、4か所の地域子育て支援センターで、「子育て広場」等の名称で、未就園児の親子教室がほぼ毎日開催されている。そうした状況の中で、本学の「子育て・子育てワークショップ」に参加する理由や利用実態を調査、分析することによって、大学が行う「子育て支援」の在り方や課題が明確になるとと思われる。

②世代間交流の機会の創出(平成24年度から実施)

子どもは、地域社会の様々な人間関係の中で育っていくという視点から、「子育て・子育てワークショップ」に様々な年齢、関係の人たちとの交流の場を再生していく。そのため、地域の高齢者や学童に対して、「子育て・子育てワークショップ」への参加を呼びかけ、本学の学生とともに子どもの育ちや子育てを实际体験し、子育ての親子と交流を図っていく。(本学の場合、参加の呼びかけは北名古屋市と連携し、北名古屋市を通じ参加者を募っている。)

また、地域で行政主導のもとで開催されている「乳幼児ふれあい学習」や「親子教室」、「高齢者とのふれあい事業」等に対して、「大学の施設開放」の一環として教室の利用や共同運営を図る。こうした子育て親子との交流が、どのように意識の変化をもたらし、親子に影響を及ぼしたかを検証していく。

06 子育て支援事業の内容について(2)

③地域で展開される「子育て支援」にかかわる事業や活動のネットワークの活性化(計画中)

障がい児及び障がい者や児童虐待等、青少年育成に関しては、現在、行政主導のもとで各種の協議会が形成されている。大学として、「子育て支援」という視点から、これら各種協議会に積極的に参入し、自治体担当者、各種関係団体等との定期的な情報交換、意見交換を重ね、地域の子育ての実態を把握するとともに、事業・活動の点検・評価に主導的な役割を担い、課題・問題点を抽出し、解決策を検討していく。

また、大学の人的資源として「学生」の役割も欠かせない。具体的には、「子育て・子育てワークショップ」への参加はもちろん、地域の保育所、幼稚園、障がい児・障がい者施設等で行われている「行事」への応援などであり、これらの成果をまとめて報告することにより、さらにボランティア活動を促進することである。学生自身が経験を積み、学ぶことが多いばかりか、地域の人に大学や学生について生の姿を知ってもらう絶好の機会ともなる。

④大学ならではの地域の「子育て支援」事業の試行(計画中)

③の取り組みの中で浮かび出た子育て支援のネットから事例を捉え、各関係機関、団体、関係者のそれぞれの役割、分担を確認する。

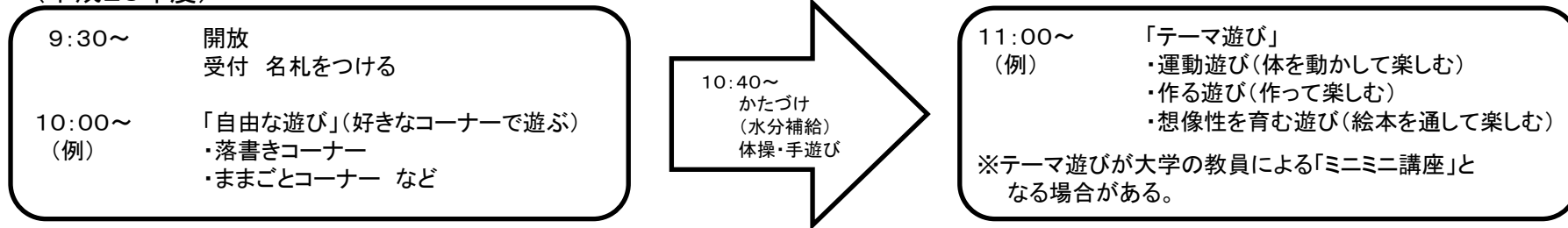
知的能力、病気等が原因で、子育て支援事業の存在を知らない、あるいは知っているも利用しない、拒否的な人たちに、大学人は制度的に介入していくことは困難であるので、大学の取り組みとしては、たとえば問題を抱える家庭・家族に深くかかわり、助言・指導を任務とする民生・児童委員に対して、定期的、継続的な「ワークショップ」の場を設定し、間接的支援をしていく。

また、落ち着かない、気になる等の子どもを抱える保護者を対象とした相談援助は大学の知的資源を発揮しなければならない領域であり、自治体等の行っている「子育て相談」や「保育所」、「幼稚園」、「子育て支援センター」、知的障がい児通園施設等へ、たとえば大学ならではのこととして相談機関の相談、支える専門家の問題解決へのアプローチ、共同解決などがそれにあたる。

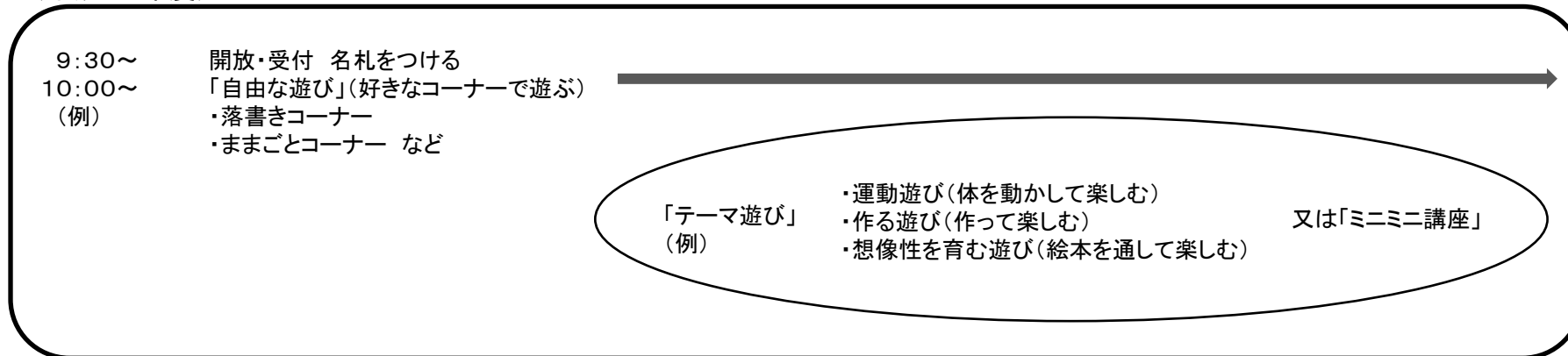
子育て・子育てワークショップ

(1) 一日の流れ

(平成23年度)



(平成24年度) 23年度利用者アンケートに基づき分析し、その結果から、遊びを区切らず「自由な遊び」と並行して「テーマ遊び」を採り入れる形とした。



(2)環境構成



子どもたちに影響を与えず、様子を観察する「観察室」を隣室に配置。

◇設置場所
名古屋芸術大学東キャンパス11号館
(愛知県北名古屋市熊之庄古井281)

◇面積
子育て支援室: 173. 26㎡
観察室: 20. 48㎡
屋外遊びスペース: 200. 22㎡

◇主な設備
冷暖房(床暖房付き)
砂遊び場
水遊び場
ビューボード
・専用筆記具を使用し布でふき取り可能
・映り込みが少なく、プロジェクター投影も可能



(3)ミニミニ講座

- ・大学で行われている研究内容を市民に提供し、市民との会話が生まれるように「子育て・子育てワークショップ」を通して、市民(親)と語る「ミニミニ講座」の場を設けた。
- ・開催時間は、「子育て・子育てワークショップ」開催日の日程後半30分を利用した。人間発達学部を中心とした専任教員から、自発的な申し出により、平成23年度は11回、平成24年度は3回開催した。平成25年度からは、前述した取り組みテーマごとに5つのプロジェクトを作って核になる教員を中心に研究を実践していく。

1 講座内容

- ・主なテーマ: 「子育てで、やってはいけないこと」「こちょこちょ大作戦」「子育てを楽しく 〜モンテッソーリに学んでみよう」「楽器で遊ぼう」「大人と子ども 〜食べ物〜」「発達の節を理解して子どもを捉える」「大人と子ども 〜できごと〜」「音の出る物をつくって遊ぼう」「サルの子育てヒトの子育て」「3ヶ月・3歳・3年生」「子育てのポイント ―食育(内部被爆)―」

2 形態及び会場

- ・基本的には親子分離をして、親が落ち着いた気持ちで講座に参加できるようにする。
しかし30分という短い時間ではあるが、乳幼児の年齢が低いこともあり、無理をせず親子共に慣れることによって、いろいろな分離形態をとるように工夫する。
その過程で学生が保育にあたる体制をとる。
- ・会場は子育て支援の部屋を基本とするが、講座内容や状況においては、講師の教員に任せる。

参加した親子に見る成果(親の感想から)

◇遊びの広場から

- ・子どもが木のおもちゃなどのあたたかい感触と雰囲気の中で、自由に遊べる。
- ・学んだ遊びの技術を家で使い、親子の安定したふれあいがもてる。
- ・学生にふれあって親や家族と違う世代の人と関わり、憧れをもつ。
- ・親同士の友達ができる。
- ・学生の動きに若さとパワーをもらい、新たな活力が生まれる。

◇ミニミニ講座から

- ・不安に思ったことが解決でき、安心感をもつことができる。
- ・学んだことを地域の同じ子育て仲間にもつとめる。
- ・地域ではグループ活動が生まれつつある。

◇世代間交流から

- ・童謡を歌って聞かせる大切さを感じた。
- ・祖父母世代と遊んだり話したりする機会が少なく、貴重な体験だった。
- ・童謡を知らない世代(学生)が発生していることに驚き、子どもにたくさん歌ってあげたいと感じた。

◇評価結果および今後の課題

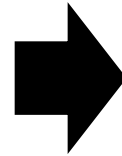
- ・ワークショップでは毎日参加者に感想を書いてもらっている。
- ・研究課題を決めて、それに即して記入を依頼している。
- ・平成23年度は遊びのあり方についてであり、その反省をふまえて平成24年度は実施している。
- ・平成24年度の最初の回で、親や高齢者から「自分たちの集まれる場として活動したい」という声があった。それに応えるにはどうしたらよいか目下、大学として検討中である。

学生、教員・保育者養成に見る成果

- ① 「子育て・子育てワークショップ」の対象は、「地域の子育て支援を受けていない1・2歳児とその親」である。この対象は通常、専門科目などの授業で取り上げる教育・保育現場における「教育・保育課程」で扱うことは少なく、また、制度の中で運営される教育・保育機関における「子どもの姿や実態」には示されない家庭育児での1・2歳児であるため、かかわりや学習及び研究の素材として、貴重な対象を得ることができた。
- ② 「子育て・子育てワークショップ」終了後に参加した親子が、ワークショップの場以外の場(例えば学食等)に滞在し、ワークショップに参加している人間発達学部の学生だけでなく他学部の学生も親子に話しかけることで地域との交流ができ、大学内環境が活性化する傾向がみられる。
- ③ これまで大学内には学生や教職員しか存在せず、地域社会と比較して多様な世代が集まる場所ではなかったが、「子育て・子育てワークショップ」が存在することで、大学内に多様な世代が集い始め、交流が生まれ、特に学生のコミュニケーション力が高まってきた。
- ④ 学生にも感想を書いてもらっている。平成25年度からはこのワークショップをもとにし、学部を越えた学生との研究会を計画している。
- ⑤ 「子育て・子育てワークショップ」の子どもコミュニティセンター化によって、全学部の教員から運営委員が選出され、全学部の交流する機会がより拡大する基盤ができつつある。

本取り組みが経営基盤充実に期待できる点

- A 参加者の市民性の向上、次世代育成リーダーの醸成
- B さまざまな世代が大学で学び合う土壌づくり
- C 祖父母世代の自己肯定感を高め地域社会へ還元
- D 北名古屋市および周辺自治体との密接な連携



大学の
ブランド
づくり



経営基盤
安定強化

音楽・美術等の教育環境を活かし、学部との融合的な取り組みを実践する本学が、子育て支援の拠点として認識され、その結果として保育士・幼稚園教諭を目指す学生を誘引し、音楽・美術学部の学生にとっては芸術によるコミュニティづくりへの発想を豊かにし、各学部への志願者を増やしていくことで、経営基盤の強化に結びつくこととなるものと考えられる。

他大学のモデルとして

多くの大学で実施している「支援センター」では次のような点が共通している。

- ①遊びの広場を展開している。
- ②学生が関与し、保育者養成教育とつなげている。
- ③教員が専門において参与している。
- ④事業を通して何らかの形で地域と関わっている。
- ⑤大学の活性化とノーマライゼーションが意識されている。

しかし、立地する自治体と提携しているところはあまり見られず、地域の人材や文化を必ずしも十分に活かしていないし、世代間交流なども取り入れられていない。



それに対して本取り組みの場合は上記「A～D」までの取り組みを行っている。

その手順を示していくことにより、単に「子育て支援センター」を開いていくだけでなく、大学が地域の中でゆるぎない存在になる道筋を見出すことができる。